

資料(9)

農青社(パンと自由社)「最近運動の組織並に形態に就ての一提案」(昭和六年10月11日八月中旬刊)―(注58)―

(注58)「パンと自由」社は、当時、小野(農青)グループのアジト、農青社出版物。

序
俺達はこの無政府主義の組織及び運動形態について提案したい。今日、俺達の運動の沈滞が、即ちこの組織及び運動形態に起因していると信ずるからである。嘗て俺達はサンジカリズムを清算した。また、その他の不純物に対しても、その鋭鋒をゆるめはしなかった。而していま一路アナキスト革命に向かって直進せんとしている。このとき俺達は、俺達の組織及び行動について確乎たる認識と覚悟をもたねばならぬ。この提案は俺達の卒直な意見である。

(俺達はここに例証した黒聯及び白聯に対して、単なる批難、攻撃をするものではなく、また、その解散のみが問題ではない。要は自主分散の強調にあるのである。)

一、自主行動について

今日、見るところによれば、各人はむしろ組織体に押されて活動しているようだ。各人の自主行動は姿をひそめた如き状態だ。何等かの行動に出ようとする、たとえば一枚のビラならビラを撒こうとするときには、聯盟なら聯盟に持ちこみ、そこで大勢で協議し、誰がそれを刷る、誰がその文案を書く、そうした手続きのあとでビラはようやく生れてくるのである。

そして、また、それを撒くための会合――即ち、凡てのことは一度そうした中心的総聯盟にもちこまれ、そして、それから逆に俺達のところへ帰ってくる。これが今日まで行われて来た運動形式だった。

これまで、そうした集中組織の善悪可否が殆んど検討されないうままにやって来た。そして、その検討が為されなかったと言うことは決してそれが無条件で承認されたということではなしに、俺達に組織に対するはつきりした認識がなかった結果である。

萬宝山問題から変転して全鮮各地に続発して行ったさきの全鮮暴動事件が革命的暴動にまで進展しなかった理由は多く列挙できる。しかし、その最大の理由のひとつとして、それが集中組織に基くものであると言える。朝鮮を打って一丸とする総聯盟の結成が要求され、その大組織が成らないうちは、手も足も出ないと躊躇しなかったらうか。

これに反し、最近、英領ビルマに於て猖獗しつつある農民蜂起は何等の中心的組織体をもたない。それは農民の如何なる集中組織をも持たない自主行動によるものだ。もし、ビルマ農民が集中組織に拘泥し、そして自主に対する透徹した精神がなかったならば、ビル

マ農民は必ずや、全鮮暴動のごとく鎮圧されたであらうし、また、自然的にも鎮消して行ったであらう。

けれども自主に徹するかれ等は、今日、なお絶体に英國の支配に対し抗争しつつあるのである。若し俺達が自主に徹すれば決して集中組織は有りえないし、制肘的な集中組織がないならば、必ず分散的に随所からの自主行動がある。各地各所から、各人各群の自発的自主行動の火の手がもえあがる。これが黒色運動に必須である。俺たちには最初から集中組織はあり得ないはずであった。

老マラテスタは述べた。亡命ロシアアナキストによつて提唱された総聯盟の集中組織の結成に対し「吾々すべてが単一の聯盟に団結することは少しも望ましいことではない。」それはかならず「すべての勢力をあつめてそこに包括する手段となるよりは、むしろ、各個人の活動を阻害しまた内部闘争激化の一誘因ともなる」と強権の発生と行動の消極化、無力化を説いているではないか。

二、分散に就いて

俺達はまず最初になにもあれ、雑誌を出す。しかし、それは決してその俺達のいる村、町へ対してなされるのではない。そして全国の公認アナキストに配布される。それは決してその土地の民衆に対し叫びかけられた啓蒙や、行動の鼓舞のためではない。これは一体いかなる意義であるか。また、多くの通信は中央にむかつてなされる。しかも俺達はいかに中央の聯盟に文書を飛ばそうとも、また、リーフレット類が全国のアナキスト間に配布されようとも、俺達みずからの土地に対する行動が為されない限り、それは永遠の保守であり伝統である。

そうした時に俺達は一体何処において革命を行なおうとするのか。誰が解放されねばならぬのか。各人みずからの土地に対する積極的な働きかけが為されず、どうして俺達は革命をやるつもりだ。また参勤交替のように上京してアナキストとしての箔をつけてくる。また箔がついたごとく考えている。それは全く醜状だ。

凡ての集中組織にはかならず英雄主義が付きものだ。多人数の集合には必ず虚栄的な言説が吐かれる。それは人間のながい習性による支配的感情だ。だから誰もがこぞって革命的言辭を弄せんとしてお互が競争心理におかれ実行の計劃はヌキだ。

そして革命にいたる一步一步の道を堅実に歩いて、足を地につけて行こうとする人々、そうした平凡な非凡人は、もはやそうした集団に止まらない。そして、その集団から出て行く。でなければそうした連中の空氣の同化して、彼自身も一步一步の前進を棄ててかの革命的言辭を弄する仲間に入るかである。たとえば無政府コンミュニシンの思想が民衆の中へ拡がりをもたなければ、真の革命的解放が行われないにも拘らず、それは手ぬるい、暴動が暴動に終わってもそれは一体何だと放言して憚らない。

俺達が今何を為すべきかを語り合うとき、運動の多様性を無視し、日和見主義、事勿れ主義などと罵声を放つてかえりみない。それは全く暴状だ。

宣伝と鼓舞、それは現状に照して急務である。意識的に黒色の目標をかけた民衆運動が起るまで、そこまで発展しなければアナ

キスト革命は成就しない。そして、それをいかに強調したからといって、秘密行動の実行から逃避するものであらうか。秘密行動は論議したり、せねばならないと公然高唱すべき性質のものではない。それを公開することは、却ってその実行を阻むものだ。

それなのに、かれ等は論じないでいられない。それは実行のためか。真に実行せんとするものの態度か。

俺達はここにも、また、集中主義、宗派主義、英雄主義の誤謬をみる。各人、各群が各所で、各々の自発行動をして行けばよい。若し、その思想、行動に誤まった点があるなら、進んで善意の忠告をこころみればよい。

少くとも俺達とともにアナキスト革命を目指していることに於て共通である。誤謬を犯すのは、おそらく意識的にそうするのではあるまい。知つて為すものは別だ。だが、過つてなすものに対して除名問題が起るのは党派意識だ。それはいかに対外的な大義名分があつても、内部的には多くの場合、生活態度に対する相互のあつれきから起るものである。

それならばその生活態度がいずれに理があり、いずれに正があるかを冷静に判断すれば明白に結論が出ることだ。

老マラテスタは言った。「無政府主義の真理は一個人若くは聯盟の独専物ではない。それは許されぬことだ。」党派的に独占されたとき、運動の正当なる進展は望めない。「真理は実際の多数によつては、或は仮定的多数の判断によつて左右することはできない。」と。集中を否定せよ。中心を作るな。それは必ず宗派主義となり、実際の多数、若くは仮定的多数が正当だとうぬぼれることになるのである。一切の中心をもつ組織を俺達は否定しなければならぬ。俺達にはただ自主分散以外にはあり得ない。だが、もし、自主分散ということをも単なる離合集散の意味の離散であると解釈すれば間違ひである。

俺達が完全な自主分散の行動をするなら、集団の群集心理から影響的に運動のはしぐれにつながるようなことは無くなるだろう。俺達の自主は知識としての理解ではなく、革命の意欲そのものの各自の活動である。

そして、いま分散の空氣は一応、東京中心を否定した。しかし、それは単に今日の状態では中央集権から地方分権に拡大されたにすぎない。関西でも、中部でも、その他に於ても運動はやはり総聯盟の中心に集約されている形である。

けれどもそうした中心組織がないと運動はヘタヘタに崩壊してしまふだろうか。否、俺達には自主がある。

三、自主分散の強調

俺達の自主活動が何故行われなかったか。

その理由は、聯盟、組合の集中組織、その中心によつて全て処理されたからだ。そのために各個人の無限な自由の活動に習慣づけられなかったからだ。

そして、その各個人の活動を阻害する集中組織を格別気にしないほど、俺達自身、自主の觀念が正當に認識されてなかったのだ。「労働者の解放は労働者自身の手で」あるいは「自主自治、俺のことは俺で」とも叫んだ。

けれどもその焦点は政治否定のための合言葉としてしか認識しなかった。俺のことは俺でというその口の下で、運動は集中組織に任された。そこで、それは前述したように相互の力を減殺するだけである。

その場合、啓蒙をやるうとする者、秘密行動をやるうとする者が各人各様、自分自身の考えたことを即座に実行にうつしてこそ、運動は多種多様に進展する。

しかし、反対者は集中組織がなければ俺達の力が弱められ、混乱状態になると言い出すだろう。否、集中組織に於てこそ次の結果を生ずるのである。

例えば秘密行動なら行動、啓蒙なら啓蒙、電車問題なら電車問題、なにか唯一の提案にあつた人々を動員しようとする。その結果は誰もが誰もの要求でもない、集まってデッチ上げられたものを実行に移なければならなくなり、それは勿論、誰をも熱中させ得ない性質のものとなることは明かなことである。

それが自主行動によれば、そういう結果にはならない。たとえば、ここに六桃園の少年暴動がある。また、そこには病める妻、失業者の夫、大勢の子供をかかえた資本主義の犠牲者がある。ここには悪家主によって家賃不払のため家をしめ出される問題がある。あるいはもつと積極的な無政府コンミュニズム思想の普遍化をおこなう問題がある。問題は雑多であり、多種多様である。その一切の問題に対する俺達の方法は、聯盟という「集中組織」を通じて解決するのではない。俺が自主的に渦中にとびこんで解決するのだ。俺がピラを刷って撒布する。俺が計劃して俺独りでも行動する。それは一体いかなる組織体が必要とするだろうか。

そして、その俺は、必要に応じて仲間の協力をもとめれば充分だ。今日まで、この方法は思想団体とか、労働団体とかをつくり、そして民衆の中から適当な人物をえらび出してその団体に吸収するということであつた。これは全然誤まつている。俺達は集中から出発すべきでない。

俺達は吸収のかわりに、一刻も早く新人に対して新しい世界観を吹きこみ、新人は新人でひとりのアナキストとして、かれが自身でかれの要求する場所で独立的に自主行動を開始することだ。俺達の主眼点はこうした意味の自主の体得を訴えることにある。

ひとつの組織が老成に集中して行くことではなく、つねに分散して、分散から分散へと外部に向けて拡がって行き、そのひとりひとりが銘々に自主行動を起こすことである。そして、これは何物にもまさるアナキズム運動の行動原則である。

この原則的の徹底普遍実行こそ最大の重要事だ。つきからつきへの無数無限の拡がりがあつてこそ、意識的に無政府コンミュニズムへ動向せんとする民衆運動がそこに生起する。

このような黒色民衆運動が民衆の中から次々に湧き立つのではないが、いかに少数派が民衆を駆り立てようとしても、単なる政治的変革に止まるボルシェヴィキならばいざ知らず、思想の把握によってのみ可能なアナキスト革命は絶対に起こりえない。

今日まで、各国に於てアナキスト革命が起きず、真の解放がなされない所以はここにあるのではない。

分散も自主も、決して新しく叫ばれたことではない。むしろ、俺達のあいだでは博物館の感覚だ。しかし、それですら、なお集中組織が持たれ、それにしがみつき、自由聯合が死物となり、自主活動が収縮してしまつた。俺達は、現在、そんなことはわかつているといった悔度ではなく、明確に自主分散の意義を体得せねばならない。それはいわばアナキズム組織論だ。

四、結成主義の誤謬、黒聯、自聯の解散

三人寄れば雑談、五人あつれば結成、この結成主義の誤謬は、いったいどこから来るのか。俺達が自主活動の分散に徹したならば、最早、集中組織は無用の長物である。俺たちが行動を開始しようとするとき、なにゆえ結成とか、漫然たる寄合世帯をもたねばならぬのか？ そのような必要はない。

たとえば、現在（黒聯は一結社にまで組織が縮小されていることは事実だ。だからと言って俺たちはたとえ、関西アナキスト聯盟が全国黒聯加盟申込の如きを単に、彼等の黒聯に対する認識不足と解して放任してはおけない。なぜなら、俺達は黒聯のながい伝統が、なお、現在も地方の同志を誤まらせ、また黒聯同様の組織を地方において結成させる誤謬を、今後も幾度となく起こさせることになるのである。この事実が、黒聯の伝統及び觀念だけでなく、組織そのものの誤謬と言うべきである）黒聯、自聯が解散して、アナキストの活動が消滅するようなら、それは全く問題外である。

勿論、それは解散の罪ではなく、アナキスト自身が、実はアナキストでなかったからである。しかし、解散によって運動が消滅し滅殺すると考えるのは一片の杞憂だ。

おそろく阻害されていた各個人の自主活動が回復し奔放に動き出すことは疑う余地がない。俺達の主張の要点はここにあるのだ。それ故、俺達の行動は結成が問題ではなくして、個人活動の確立、そして個人相互の自由な結合、すなわちピラミッド式集中組織による活動ではなくて、平面的な、分散的な、自由細胞的活動、すなわちこれである。これによつてのみ運動の進展は必ず倍加する。

それは無限に拡大する。そして、俺達相互にその重大な責任を負担することを自省したい。マラテスタは「如何なる機関も本能的にその永久の存続をのぞむ」。けれども「有力な活動を為し得なくなった場合は、むしろ、その組織を棄てたほうがましだ」と控え目に説いている（しかし、尚、俺達はその組織形態をもつてしては何物をも為し得ないと言いたい。）

俺達は、ここで端的に、黒聯、自聯、その他の同形の一切の組織結成の解散を提唱するものである。

「地主がなくなれば誰から田地を借りるか」とある農夫は革命後のことを心配した。けれどもこの心配は不要である。耕やす者に土地は自由だ。これと同様、その組織体が無くなつたて何うして行動することができようと、一時は模策するかも知れない。しかし、

俺達はなにを模索するのだ。行動は個人から出発する。皆んなで研究会もひらける。必要なときクラブを作ることだってできる。第一に無政府コンミュンを民衆に知らせる運動がある。それからもつとアナキズムを知らせるために研究会をやるだろう。隣人からでも、同じ職場の人々からでも、あるいはベンチに腰をかけて物思いにふけっている人々にも無限な舞台がある。

そして、もし、全アナキストの名において為すほうが効果がある場合は、随時、その場にふさわしい名称をつくって、全アナキストたることを示せばいい。

そしてそれが終わったとき、それは自由に解散すればいい。「必要に応じて集まり、終れば散る」それがもつともよい方法だ。そして、俺達は、もはや、明確な組織論を以て、一切の集中組織を否定せねばならぬ。

而して、明確な自主分散の実行によってアナキズム運動のもつとも大きな飛躍を期せなければならない。ここにはじめて真のアナキズム革命の可能性が生れる。

下から上へ、円周から中心への否定！

結成から分散へ！

集中より自主分散行動へ！